
松尾瑞穂『ジェンダーとリプロダクションの人類学—インド農村社会の不妊を生きる女性たち』（京都：昭和堂、2013年、310頁、本体5,500円＋税、ISBN978-4-8122-1232-5）

（評）杉本 星子*

インドはメディカル・ツーリズムのメッカとして知られる。商業的代理出産が合法化されていることもあって、近年は国際的な生殖医療ビジネスの中心地ともなっている。インドの不妊問題をテーマとした本書は、こうした現代の生殖医療問題を扱うという意味で大いに注目されよう。ただし、インドにおける生殖医療技術の展開や代理出産の現状そのものに関心をもつ読者には、ぜひ著者のもう一つの著作『インドにおける代理出産の文化論—出産の商品化のゆくえ』（ブックレット＜アジ

* 京都文教大学総合社会学部教授（社会人類学）

・ 2009、『サリー！サリー！サリー！—インド・ファッションをフィールドワーク』京都文教大学ブックレット2、風響社。
・ 2006、『「女神の村」の民族誌—現代インドの文化資本としての家族・カースト・宗教』、風響社。

アを学ぼう」> 29、2013 年、風響社）の方をお勧めしたい。むろん、本書も医学的な不妊治療の現場を報告している。しかし本書の目的は、不妊治療そのものを描くことにあるのではないからである。著者は、序章「逸脱＝サファリングとしての不妊」の冒頭部分で、「不妊はつねに、生殖能力の反転、ネガとして存在する」と述べる。「子どもを産み育てること、すなわちリプロダクションが自然であるだけでなく、きわめて社会文化的な現象であるならば、それらはいかに意味づけられ、構築されるのか。そして規範や欲望との相互交渉のなかでリプロダクションの営みはどのように形作られるのだろうか。こうした問いに、本書は生むことそのものではなく、むしろそこからの逸脱とされる不妊からアプローチする」（p. 2）のである。かくして、この本は、一見、時流にのった生殖医療研究にみえるが、実は、マハーラーシュトラ州の農村地域において不妊というスティグマを負って生きる女性たちに焦点を当てることにより、インドの性と生殖、ジェンダー、家族、さらに社会構造そのものを再考しようとする、まことにオーソドックスかつ意欲的な人類学研究である。そして、まさにそこにこそ本書の大きな意義があるといえよう。

不妊を生きる女性の苦悩は、社会構造によってつくりだされる。序章「逸脱＝サファリングとしての不妊」では、不妊女性の苦悩を、「産む性」として社会的に規範化された女性の身体から逸脱し、「望ましくないこと、あってはならないこと」としてスティグマを負わされることによって生じるサファリング＝被傷性と捉えるという、研究の視座が述べられる。それに続く第1章から第6章では、マハーラーシュトラ州の農村地域において不妊を生きる女性たちの葛藤と、彼女たちがスティグマを克服するために「治癒」を目指して行うさまざまな行為が報告されている。

第1章「水田の広がる村—マハーラーシュトラ州ムルシ地域」では、フィールドであるマハーラーシュトラ州ムルシ地域の社会が概説される。第2章「産む身体をめぐる規範と力学」では、「産む性」として社会関係の結節点として位置づけられた女性の身体について、少女のセクシュアリティへの規制やカースト内婚・氏族外婚といった婚姻規則による規範化と、女性の避妊を中心に行われるリプロダクションの調整という二つの側面から検討される。村の女性たちの生殖の実践は、初潮、婚姻、出産、家族計画による避妊手術という女性のライフサイクルに沿って展開する。そこには公立病院や保健所、民間クリニックや診療所、マタニティーホームといったさまざまな医療施設が関与している。とりわけ家族計画は、保健職員、保育所スタッフ、そして家族や隣人にあたる身近な女性たちをとおして、生活の隅々にまで浸透している。

第3章では、不妊をめぐる言説と不妊を克服するための具体的な対処法が、不妊女性のライフストーリーをもって語られる。不妊は、ワンザ（不毛）という不妊女性を指す言葉が特定個人に向けられる「名づけ」によって認識される。そして、さまざまな病因が探られ、病因に応じた対処が開始される。その対処法は、日常的領域、宗教的領域、身体的領域の三領域から構成される。第4章は「協同性の苦悩—不妊体験の日常的領域」と題して、日常的な家族、親族関係において不妊がどのように生かされているかが、報告される。筆者は不妊女性たちの語りから、彼女たちが共同体か

らの排除や婚姻の危機というサファリングを受けながら、単なる犠牲者にとどまっているのではなく、時にはサファリングの与え手ともなり、また、夫婦の「愛情」の強調、流産の体験や妊娠の模倣、複婚の相手選びへの積極的な関与といった行為によって共同性の回復を試みていることに注目する。

第5章「誓願のネットワーク—不妊体験の宗教的領域」では、断食や誓願、そして女神サッティ・アスラの怒りという女神信仰に基づいた、ローカルな女性たちを中心とする儀礼的対処法と、祖霊による不妊というサンスクリットの病因論による、ローカルな地域社会を越えた儀礼的対処法が論じられる。同じ村で生まれ育った人々の間でも、ジェンダーやカースト、宗教、世代、ローカリティにより宗教的な知識や技術は異なる。女神信仰は、男性やバラモンをはじめとする上位カースト、仏教徒とは無関係である。一方、祖霊による不妊への対処法としての儀礼へのアクセスは、バラモンや上位カーストで経済的に上層の人々にしか開かれていない。しかし、いずれの病因論においても、不妊の原因は女性個人に帰されている。

第6章「医療化のイデオロム—不妊体験の身体的領域」では、不妊を医療技術によって管理しようとする生殖医療技術の展開とそれによる不妊の障害化、身体の医療化とそれに伴う「卵子」、「子宮」への断片化が扱われる。不妊は女性の問題であるという根強い社会的な共通認識の下で、男性不妊の問題はタブー視されている。そのために男性不妊の治療は大きな葛藤を引き起こすのである。また、とくに若い世代において不妊の医療化が宗教やカーストという個人の属性を越えて広がっている。しかし、現金収入の少ない村の女性たちにとって、都市での不妊治療の継続は経済的に難しく、体外受精や顕微鏡受精にまで進む人は多くはない。

こうしたフィールドの詳細な事例に基づいて、終章「『回復』を希求する」では、不妊を生きる女性たちの葛藤とそれを乗り越えるためのさまざまな行為が、社会規範への応答すなわち、世界内個人が世界に応答し世界との不協和音を調律しようと試みる苦悩の実践として論じられる。著者は、インド農村社会における＜逸脱＝サファリング＞としての不妊は、複数の領域にまたがる多元的な経験であり、社会関係の中で複合的に形成されると述べる。それは、個々人が状況に応じて行う実践的対処であると同時に、それ自体が不妊という＜逸脱＞を説明づけ、また、＜逸脱＞した個を再び全体（社会）へ埋め込もうとする、社会に用意された回路だともいえるのである。そして、逸脱を「回復」し他者の承認を求める実践は多岐にわたるが、そこにおいて誰がどのような選択をするにせよ、それは『子どもを持つ』『母になる』という実存的理由に裏打ちされた社会的規範に向かう道徳的過程でしかありえないと論じる。そこには、オルタナティブな選択肢（＝母性の否定）は見いだされないのである。

以上、本書の内容をかいつままで紹介したが、実をいうとこの本のよさは、このように手短かにまとめると大いに損なわれてしまう。というのも、本書の優れた点は、不妊を生きる女性たちの事例が彼女たちの語りを通して生き生きと描きだされており、しかもその語りが、彼女たちの日常であ

るローカルな地域社会やコミュニティの生活のうちにしっかりと位置づけられているところにあるからである。不妊の苦悩とそれに対する実践という、プライベートでセンシティブなテーマで、これだけの話を聴き、さらに一人一人の語りを所属コミュニティや社会階層、ネットワーク、家族や村落の社会関係をも踏まえて理解し分析するのは、並大抵のことではない。本書が十分なフィールド調査なくしては描きえない、本格的なインド社会論として高く評価できる所以である。

いうまでもなく、リプロダクションは男女双方の身体に関わる問題である。子どもを授かるというリプロダクションの成功は男女双方に祝福とアイデンティティの確立をもたらすが、しかし、リプロダクションの失敗は女性の個人的な身体の問題に帰される。著者はこうした不妊をめぐる社会的な言説のうちに、インド社会と日本社会が地続きであることを見出している。それとともに、そうした状況に違和感を持つ自分自身には「徹底的に個人化された、身体の私的所有という近代的身体観が骨の髄までしみこんでいる」ことに気づく。このようにインドと日本を往復する視線と、フィールドの女性たちへの共感と違和感を手掛かりに、著者は共同体に埋め込まれた女性の身体と生、それを取り巻く権力関係やそこに派生する暴力を見据えている。議論部分の文章が読みにくく、エージェンシー論批判が未消化であり、またインドにおける生殖医療浸透の基盤をつくりだした家族計画政策による女性の身体の政治化と医療化をめぐる議論が断片的にとどまっていることなど、いくつかの難点はあるとはいえ、著者の10年後、20年後の民族誌とそれに基づいた研究を大いに期待させる骨太の著作である。
